

内緒便

弾圧に屈せず

匠瑛探訪

— 39 —

多古町での「歴史講演会」で市内の歴史を改めて見直すことができました。

300年ほど前からおよそ140年間、幕府が禁止した宗教を地下に隠れ信仰した農民集団が、市北部の飯塚、金原、大堀、吉田の旧村むらにありました。日蓮宗不受不施（ふじゅふせ）派というあまり耳なれない僧侶と信仰農民で組織されていました。

幕府が1630年代から進めた宗教政策によって、不受派の僧侶は戸籍からはずされ、農民は公認された寺院の檀家

として登録されたものの、生きるために不受僧に信仰をよせました。

不受不施派の歴史で法難と呼ばれる幕府の弾圧が何度かありました。この地域の信仰農民に直接大きな影響が及んだのは、1694年の「元禄法難」、1794年「寛政の多古法難」と1838年「天保法難」でした。

そのころ信仰活動は禁止されていたため、市域では飯塚庵や金原新田庵（隠れ庵）や信者の家を拠点に、表に出ないように隠れて僧侶と農民が活動しました。

寛政の多古法難は、飯塚村から幕府による摘発が始まり、取り調べは市域4か村をはじめ、香取郡内の20余か村に及びました。捕縛された不受不施僧は14人、

三宅島から届けられた日誓の本尊
(金原新田・熊切家所蔵)



厳しい取り調べで、うち13人が牢獄死、1人生き残った本性院日誓（ほんじょういんにっせい）は三宅島（現在は東京都）に流罪になりました。30年ほど前に飯塚、大堀、金原地区で僧侶が信者に与えた「曼荼羅（まんだら）本尊」の所在調査をしました。持つことを禁じられていた不受不施僧によるものが、50幅ほど発見されました。

このうちの1幅が今回紹介する流罪僧日誓が、三宅島から金原村新田の信者に与えたものです。日誓は流罪になってから35年間、三宅島で生き抜き、許されることなく亡くなりました。

今回の講演会では、流人島と本土の信者との物資のやりとりを仲立ちした、江戸川岸の店の存在が報告されました。こうした店により幕府の目を逃れた「内緒便」として、僧と信者との間に交流があったのでしよう。

市域での不受不施派の活動が現在までにわかつているのは、僧50人余り、信仰農民は約500人を数えます。幕府が禁止し厳しい弾圧にも屈しなかったこの歴史は、語り継がなければならないですね。